

## 「ゆるさ」 佐佐木定綱

二〇一五年は戦後七〇年ということで、各誌が戦後七〇年特集をやり、現代短歌評論賞の課題も「戦後短歌七十年を現代の視点で考察する」と、節目とする動きが多かった。

「短歌研究」十二月号では「歌人アンケート 戦後七十年を記憶する歌」として七〇年間の出来事と歌が特集されている。

・ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も立てなくくづをれて  
伏す 宮終二『山西省』

・一分の黙禱はまこと一分かよしなきことを深くうたがふ

竹山宏『射禱』

・あなたは勝つものとおもつておましたかと老いたる妻のさびし  
げにいふ 土岐善磨『夏草』

そんな中、京都で「時代の危機に抵抗する短歌」というシンポジウムが開催された。(このシンポジウムはその後「時代の危機と向き合う短歌」というタイトルで早稲田でもおこなわれた。)角川「短歌」十二月号「個」として言葉に向き合う(澤村斉美)によると立ち見まで出るほどだったという。

シンポジウムでは検閲や自主規制など、「言葉の危機」について盛んな意見交換が行われた。澤村は「今の言語状況において短歌が何らかの圧力に遭ったという例をまだ聞かないが、やはり怖いのは私たち自身の心の中だろう。危機は、空気を読んで「萎縮」

するかもしれない私たち自身の中にある。」としている。

現在は戦前と似た雰囲気であると言われる。安保法案が可決され、テロが起き、フランスやアメリカでは極右政党の人氣が上がっている。

澤村の言葉通り「空気を読んで「萎縮」してしまふのが一番恐ろしい。雰囲気は誰かが作り出す物ではなく、ひとりひとりが勝手に空気を読んで作り出す。自主規制が始まればその連鎖は取り返しのつかないことになってしまう。

こういうことを言われるとぼくは困ってしまう。日本も世界もなんだかきな臭いのは感じているし、努力をしなければ平和は実現できないと思っている。

ではなにに困るかという点、歌が作れなくなる。言葉の危機や時代について歌わなければなどと大上段に構えると難しくて、歌が出てこない。かといってこんな状況で、時計を見間違えて一時間早く出勤したなんてどうでもよいことを歌うというのも……と思うと身動きが取れなくなる。自粛は逆の面でも起こりうるようだ。

率先して大きなテーマを歌う必要も、社会情勢への自分の思いを歌う必要もない。大きなことをやろうとすると二の足を踏んでしまうなら、身の回りのことからおこなえばいい。安保の歌が歌えなくても、道路を走る自衛隊のトラックの歌なら歌えるかもしれない。

歩みを止めて、口をつぐんでしまうことだけは避けなければならぬ。必要以上に構えず、連綿と止まることなく歌い続ける「ゆるさ」のようなものの重要性を考えた。